

# タイの人類学的研究からみる 相互行為と社会秩序

高城 玲

## アブストラクト

本稿は、変動の中にある現代タイ社会をマクロな政治経済学的分析のみで捉えることに疑問を呈し、人々の行為に足場をおいたミクロな視点からもタイ社会を照射する分析方向を探るための予備的考察である。その目的は、タイにおける相互行為と社会秩序をめぐる問題に対して、ミクロな分析を特徴とする人類学的研究が、これまで如何なる議論を積み重ねてきたのか、研究の歴史を紐解き、残された問題の所在を明らかにすることにある。

取り上げるタイの人類学的な先行研究は、「ルースな構造とパトロン・クライアント関係」、「儀礼、実践宗教」、「ルークスア・チャオバーン、恐れ、村の中の国家」、「インフォーマルな地方有力者」、「日常生活における相互行為」という大きく5つの方向に整理して論じる。

先行研究の整理から、今後の具体的な分析に残された問題や乗り越えるべき問題として指摘されるのは、「選択自由な行為観」、「関係の実体論」、「主観主義的相互行為論」、「観念的体系の構造論」という概ね4つの問題である。従って、今後の新たな研究では、選択自由な主観主義的相互行為論を相対化し、慣習的、拘束的な行為のやりとりを相互行為として対象化すべきこと、また、これまで分析が行われてきた宗教儀礼以外の集まりの場にも具体的な分析を拡張し、日常的な相互行為と社会秩序の関係を焦点化すべきことが、結論として指摘される。つまり、今後の研究に求められる視座は、タイの社会秩序を慣習的行為の具体的過程の中に、またその行為という地平から微視的に描き出すことであると言えることができる。

**キーワード：**タイ、相互行為、社会秩序、ミクロ分析、パトロン・クライアント関係、主観主義的相互行為論

## 1. はじめに

タイは近年大きな変動の波に飲み込まれている。特に経済面では、首都バンコクを中心とする都市化と産業社会化への波、1990年代初頭にかけてのバブル経済を経て、1997年には一転してアジア通貨危機の震源地となった。2001年に

タクシン・チナワット (*Thaksin Shinawatra*)<sup>1</sup> が政権の座に就くと、強力な主導力で経済立て直しに向かったが、他方で政治的に決定的な亀裂を引き起こしている。2006年のクーデター後は、タクシン派、反タクシン派の対立を軸にそれぞれが大規模な集会やデモを組織し、2008年の空港占拠、2009年の武力衝突など混迷の度合

<sup>1</sup> 2006年9月のクーデターまで首相の地位にあった。タクシン元首相に関しては、McCargo and Ukrist [2005]、Pasuk and Baker [2009]を参照。

いをますます深めているのである<sup>2</sup>。

こうしたタイの状況は、これまで主に統計や制度論を中心とする政治経済的な分析から語られ、説明されてきた。もちろんそうした鳥瞰図的視点のマクロな分析も重要で不可欠なものではある。しかしながら、実際にタイに生きている人々、特にその具体的な行為のあり方に注目した分析は十分になされているとは言い難い。そこでは、政治経済的な鳥瞰図的な視点に加えて、人々の行為に足場をおいたミクロな視点からもタイ社会を照射する分析が求められているのである。

特に現在は、政治経済的な動きが目につきやすいバンコクを中心とする都市部にマクロな分析の焦点が向きがちである。しかしながら、選挙を行うと圧倒的な票を獲得するタクシン派の支持層は、その大多数が農村部の稲作社会に生きている人々であることも忘れてはならない。従って、現在求められているものをより限定して言えば、農村社会の人々の行為にも着目したミクロな社会分析と言うことができる。

では、理論的には行為というものをどのように捉えていけば良いのだろうか。注意すべきは、行為を行為そのものとして捉えるのではなく、あくまで社会や社会秩序との関連の中に捉えるべき点である。

つまり、行為とは人間一人で繰り広げられるのではなく、常に他の人と共に在ることによって、共に在るときに互いに行為しあうことによっではじめて可能となるのである。そうした相互行為の積み重ねによって日常生活が営まれ、そこでの相互行為の束が村における社会関係や社会の秩序、社会へと繋がっていくという視座を重視すべきであろう<sup>3</sup>。

こうした視座に立つてはじめて、変動のただ中にあるタイ社会の秩序のあり方に関して、制度論的なマクロな議論のみではなく、相互行為というミクロな視点からも照射できるという新たな分析視角の端緒が切り開かれることになる。

本稿は、そうした具体的な分析に向けての予備的考察にあたる。主たる目的は、相互行為と社会秩序という問題に関して、タイの農村社会における人類学的研究がどのように取り扱ってきたのか、その研究の歴史を紐解き、そこに残されている問題の所在を明らかにすることである。相互行為と社会秩序をめぐる大きな問題を、タイというフィールドの微視的な経験を重視する人類学的研究から整理し、これまでの研究でいかなる論点が蓄積され、そこにいかなる問題が残されているのかを探っていく。

ここで取り上げるタイの人類学的な先行研究は、大きく5つの方向に整理して論じる。以下、「ルースな構造とパトロン・クライアント関係」、「儀礼、実践宗教」、「ルークスア・チャオバーン、恐れ、村の中の国家」、「インフォーマルな地方有力者」、「日常生活における相互行為」という5つの方向から検討し、最後に残された問題の所在を明らかにしたい。

## 2. ルースな構造とパトロン・クライアント関係

タイの人類学的研究<sup>4</sup>において、日常的な相互行為を主な焦点としたものは少ない。タイの農村社会を人類学的に対象化し、問題提起的なものながら、かつて注目を集めたのは、アメリカの人類学者エンブリー<sup>5</sup>の議論である。エンブリーは、タイ社会秩序の特長をルースな構造

<sup>2</sup> この間の政治経済的な動向に関しては、日本タイ協会編 [2008]、Nostitz [2009]などを参照。

<sup>3</sup> 今村 [2000:1-5] の議論を参考とした。今村は、相互行為を広い意味での交易と捉え、社会内存在としての人間をホモ・コムニカンス（交通し交易する人間）として定義している。

<sup>4</sup> タイの人類学的研究全体の先行研究は、膨大なものの上るが、ここでは、本稿の目的に関係するものを取りあげている。なお、整理するにあたっては、以下のレビュー論文も参考とした。Chatthip [2005]、Chayan [1993]、Nishii [1999]、Pornphen [1991]、Surichai [1984]。

<sup>5</sup> エンブリーは、構造機能主義の影響の下、農村研究を行った人類学者で、日本の熊本県須恵村の研究でも有名である。タイ社会の対極にこの日本社会のタイトさを想定していた。

の社会システム (loosely structured social system) にあるとし、その対局にあるタイトな日本やベトナム社会と比較する。その上で、タイでは個人行動の許容範囲が大きいとして、個人の行動への言及を行っている [Embree 1950]。

このタイ社会をルースなものとする規定の延長線上に、農村社会の実態調査に適用したのがコーネル大学によるバンコク近郊のバーンチャン村プロジェクトであり、そこでも「極めて無定型で、相対的に構造化されていないタイ社会の特徴」 [Sharp et al. 1953:26] が指摘された。

その後、ルース概念に対して擁護と批判を含めた再検討を試みる論文集 [Evers 1969] が刊行される。その中で、カーシュはエンブリーの議論を、「基本的には、ルースな構造と関連づけることができた諸要素が『制度化』されていることを示そうとした」 [Kirsch 1969:43] と読み解く。つまり日本のようなタイトな社会は、機能主義的理解によって、社会的行為から逸脱する個人的行為は個人的偏差として解釈されるが、タイでは個人の社会的行為それ自身が機能的体系の中に位置づけられないため、そこには機能主義的理論が適用できない。その適用不能な部分をエンブリーがルースと規定し、ルースな構造に制度化されていることを示したことで、伝統的な機能主義の空白部分を埋めたと、カーシュは理解するのである [Kirsch 1969:43-56]。それは従来の機能主義における体系から漏れた部分をまた同じ手法で体系化することであり、結局は構造機能主義的な統一的体系論へと回帰していく契機がうかがえる<sup>6</sup>。

また、同じくアメリカの人類学者フィリップスは、フィールド調査と同時に、状況を設定する社会心理学的な質問票を用いて、タイ農民のパーソナリティを統計的に類型化する調査を行い、その個人主義的な性格を指摘している [Phillips 1965]。そこでの調査は、実際の行為

に着目したわけではなく、質問票で状況を設定し、その場合の行動を想定させるもので、一種のシュミレーション的なものではあったが、選択自由な個人の行為に着目するものであった。

一方で、エンブリーの議論は、ハンクスやファン・ロイ等によるパトロン・クライアント関係 (patron-client relationship) の議論に受け継がれていく。つまり、タイ社会におけるパトロン・クライアント関係を重視するハンクスは、エンブリーのルース概念を、「球技場でルールや戦略に従う運動選手のように、決められた状況の中で動き回る個人」 [Hanks 1962:1247] の存在ゆえの現象と理解するのである。ハンクスによれば、パトロン・クライアント関係の特徴とは、「パトロンとクライアント間の結びつきが、自発的で、どちらの側からもその関係を切ることができる。この関係は、相互互惠性の上に成り立っており、両者にとって都合の良い限り、あるいは何か大きな出来事があって、両者の友好的な関係に亀裂が生じない限り、継続するものである」 [Hanks 1975:199] と言う。このような認識をもとにハンクスは、ある人間をパトロンとしてできるとりまき集団 (entourage) が、時には他のとりまき集団と協力しあってより広範囲なサークルとなり、それが現在のタイ社会の秩序となっていることを指摘するのである。

ファン・ロイもハンクスと同様に、タイ社会におけるパトロン・クライアント関係を重視する。ファン・ロイは、北タイの経済関係を分析するに際して、経済学的な市場モデルでは適合しないとして、それを上位者と下位者との間の自発的互酬関係であるパトロン・クライアント関係として分析する [Van Roy 1971]。

タイ人の人類学者アキンは、このパトロン・クライアント関係のタイにおける歴史的背景を明らかにし [Akin 1969]<sup>7</sup>、その後は近年の状況にも議論を拡げている [Akin 1980]。彼によ

<sup>6</sup> エンブリーの議論をめぐるEvers [1969] の論文集に関しては、北原 [1996:134-145] を参照。

<sup>7</sup> Akin [1969] は、バンコク王朝初期のパトロン・クライアント関係を研究し、フォーマルなパトロン・クライアント関係を登録制度によって固定化しようとしたが、結局インフォーマルなパトロン・クライアント関係が優勢となったことを指摘している。

ればこの関係は、クライアントに個人的な利益がある場合、自らの意志で特定のパトロンに従い、パトロンから様々な便宜を受けるといった互恵的なもので、タイ農村社会においていたる所で見られるものだという [Akin 1980:166]。

また、ケンブもタイ中上部における農村調査をもとに、そこでの社会関係、社会組織に関する民族誌を書いている [Kemp 1984、1992]。彼は、村落を行政的に制度化された組織として見ることを避け、様々な社会関係が織りなしている社会空間として捉えようとする [Kemp 1992:1-3]。その社会空間とは個を中心とする行動の範囲を指しており [Kemp 1992:11]、また、様々な社会関係とは、パトロン・クライアント関係に基礎をおいたものである。そうした個を中心とした行動の範囲におけるパトロン・クライアント関係が、村落社会の政治、経済、宗教などのあらゆる側面で見受けられることを指摘している。

このようにパトロン・クライアント関係を重視するハックスやファン・ロイ、アキン、ケンブらの議論では、個人や個人的行為を重視する姿勢が見受けられる<sup>8</sup>。そこでは、それまでの人類学の一般理論において主流となっていた構造機能主義的な統一的体系を重視する議論を一旦は相対化しようとし、個や個の行為に着目していこうとする方向性の契機がうかがえる。さらに、その後のタイにおけるパトロン・クライアント関係に関する議論は、より具体的な行為への視線を深めていく。

例えば、タイ北部農民の政治的行為に着目したタイ人のチャートチャーイは、「タイの地方政治に関する研究がしばしば地方社会の住民の政治行為についての研究というよりは、地方行政と政治機構に関する研究になっている」 [Chatchai 1990:204] と批判するが、このこと

は、チャートチャーイが、制度論ではなく実際に政治を担う個人的行為への視線を重視する立場をあらわしている。チャートチャーイは、タイ北部チェンマイ県の2つの村落から各3名、計6名の調査対象者を選び、各人をめぐるパトロン・クライアント的な私的社会ネットワークを明らかにする。その上で、彼ら農村社会の住民がパトロン・クライアント的社会ネットワークを利用して、どのような政治的行為をとるのか、具体的な暴行未遂事件の損害賠償請求をめぐるやりとりという事例の中で検討していく [Chatchai 1990:241-253]。その結果、「社会的ネットワークにおける制約、例えば村のリーダーや有力者との間で富、権力面での不平等によって、社会のより貧困な層の住民が公然と村の有力者に抵抗するなどということは生じ得ず、むしろ有力者の保護を求めることになる」 [Chatchai 1990:255-256] との結論を得るのである<sup>9</sup>。

また、パトロン・クライアント的な関係が主に人類学における政治経済的な関係で捉えられることが多かったのに対し、ウィジェーワルダナは、北タイにおけるパトロン的な存在を意味するポー・リアン (*pho liang*)<sup>10</sup> という呼称の背景を検討し、それが、宗教的な意味や伝統的な治療師なども対象とすることを指摘している [Wijeyewardene 1971]。

タイの人類学者アーナンも民間治療師 (モー・ムアン *mo mu'ang*) とその患者との関係をパトロン・クライアント的に捉える [アーナン 1993]。そして、近年の急激な資本主義的開発によって人々が混乱に陥っているという状況の中で、その関係が、環境の変化に対応していることを明らかにしている。

以上、これまでのエンブリーによるルースという概念をめぐる研究から、パトロン・クライアント関係の議論においては、個人や個人の行

<sup>8</sup> Terwiel [1984] も、公的、行政制度的な関係よりも、インフォーマルなパトロン・クライアント関係をより重要な要素として指摘している。

<sup>9</sup> ここで言う有力者とは、制度的な行政職のみでなく、後述するインフォーマルな権力者をも含んでいる。

<sup>10</sup> 語句的に、ポーとは父を意味し、リアンとは養うことを意味する。Anan [1990]も参照。なお、本稿におけるタイ語のローマ字表記に関しては、基本的にAnuman [1961]に従う。



為に着目する視線が共通して見受けられる。例えば、エンブリーは個人的行動の許容範囲が大きいことを日本との比較の上で強調し、ハンクスやファン・ロイ、アキン、ケンプらのパトロン・クライアント関係に関する議論では、「自発的」で、また「自らの意志で」、「関係を切ることができる」などと表現されている。ここで注目すべきは、これらの研究で念頭に置かれている個人や個人の行為が、選択自由な個人、あるいは自由に選択された行為という、西欧個人主義的な姿が色濃く見える点である。しかしながら、チャートチャーイにおいては、ネットワークを利用する政治的行為という功利的な選択が可能なる行為を描きながら、他方でわずかながら示唆された「富、権力面での不平等」による「制約」という行為における拘束性に着目する萌芽も見受けられる。社会の秩序や社会との関係を究明しようとするに際して、ここでチャートチャーイが、選択自由な行為よりも行為の拘束性の側面に注目している点は重要であろう。

パトロン・クライアント関係の議論の中で、行為の拘束性や構造との関連を重要視したのはムルダーである<sup>11</sup>。当初ムルダーはエンブリーの概念を批判し、「いかなる社会においてもその成員は構造的、機能的に明確に規定された社会的地位と役割の体系の中で相互行為を行っているという認識が大切である」[Mulder 1969: 20]と主張し、タイ社会のように無秩序に見える村落であっても、統一的な構造と原則が存在することを示した [Mulder 1969:18-23]。しかし、その後ムルダーは、個人への視線を重視しながら、その個人の背後にある世界観がパトロン・クライアント関係を規定していくことに焦点を当てていく [Mulder 1979a, b]。ムルダーは「現代のタイのシステムの中で動いている一人の人間が状況をどう認識していたか」[Mulder 1979a:10]に叙述の視点を向ける点において、個人の認識を重視する。このような方法で、ム

ルダーはタイ人の権力者への主観的な認識を問題とし、認識過程におけるアニミズム的世界観を重要視する。つまり、タイ人のアニミズム的世界観によって指導者、権力者への依存関係が醸成され、その依存関係がパトロン・クライアント関係として社会構造を規定していくと指摘し、世界観と構造を結びつけるのである [Mulder 1979a:21-55, Mulder 1979b:111-131]。

ここで、個人を重視しながらその行為の拘束性を考慮に入れた点はそれまでのパトロン・クライアント関係をめぐる議論から進展を見せている。そこで、行為の拘束性、関係を規定するものとしてアニミズム的世界観で解明しようとするのがムルダーの特長であるが、他方で全ての源泉がアニミズム的世界観に還元されてしまい、そうした観念上の世界観が、全体を決定する不動のものとして捉えられてしまう危険性がつきまとう。こうして、ムルダーの議論においては、不動の世界観から規定されるパトロン・クライアント関係も、実体的にそこにあるものと捉えられる傾向が強くなってしまふ。

このことは、これまでの他のパトロン・クライアント関係をめぐる議論においても、言えることである。その問題は、関係がそこに既にあるものとして実体化した上で、その性質を分析する傾向が強いことにある。本稿の問題関心から言えば、パトロン・クライアント関係を実体的に捉え、その政治経済的な制度論的分析へと向かうのではなく、既にそこにあるとされるパトロン・クライアント関係を一旦カッコにいれ、日常生活における相互行為によって、関係性が生成される過程を人類学的な民族誌的分析によって丹念に追っていく方向がより重要である。そうすることによって、タイの農村における行為と関係性、社会の秩序という問題を考えるひとつの手がかりが得られるものと考えられる。

<sup>11</sup> 他に、タイ農村における社会構造の重要性を指摘したものに、アメリカの人類学者ポッター [Potter 1976] などがある。

### 3. 儀礼、実践宗教

タイの人類学的研究において、構造という全体系を緻密に分析し、その構造の中における行為にも注意を払った研究は、宗教的側面、特に儀礼に関する研究において展開してきた。

その代表的な研究がタンバイアによる一連の宗教研究である。タンバイア [Tambiah 1970] は経典というテキストからだけでは、村落の宗教を十分に理解できないとし、人々が宗教を実践している側面も重要視することによって、その全体的構造を明らかにしようとしている。つまりそこでは、経典というテキストからはこぼれ落ちる観念や実践を議論の射程に入れ、村落レベルの仏教と精霊祭祀に関するシンボルの構造分析を行っているのである。

その後タンバイアは、王都や王権を中心として同心円状に政治的統合があるとする銀河系政体論 (galactic polity) を展開し、仏教的な儀礼と王権、政治組織との関係を議論の射程圏内に組み込んでいく [Tambiah 1976]。ここでは、宗教や儀礼がいかに関係的な社会関係と取り結んでいるのかについての議論をすすめているが [Tambiah 1976:122]、最終的には、宇宙論的観念図式としての銀河系政体を前提として考え、その説明に重点を置いていく。

これらのタンバイアの研究は、宗教の経典以外の側面に視点を移した点、また、政治、社会的なものとの関係を視野に入れた点で重要である。だが、特に1976年の銀河系政体に関する研究では、全体的な観念体系構造を記述の

中心に据えることで、具体的な行為を始発とする視角は見えにくくなる危険性を残すことになっている。

ここでは、タンバイアが1970年の著書において、儀礼的な行為に着目し、それをコミュニケーションの体系として統一的に捉えようともしていることに注目したい [Tambiah 1970:337-350]。この時点では、個々の行為は最終的に体系的な全体に取り込まれてしまう傾向が強く記述されるが、その後の1985年の研究では、オースティンやサールの言語行為論<sup>12</sup>を儀礼分析に取り入れる必要性を理論的に唱えていく [Tambiah 1985]。そこには明確に言語行為論的視角の影響がみられ、「儀礼行為は、その構成的特質から行為遂行的」 [Tambiah 1985:128] として捉えられることとなる<sup>13</sup>。こうしてタンバイアによって、儀礼は行為、しかも慣習的、形式的な性格をもった行為との関係で捉えられることになる。が、タンバイアはこの視点によるタイの儀礼に関する具体的な民族誌記述を十分に展開していかなかった。具体的な民族誌として儀礼行為を描いていったのはタンバイアよりも後の研究だった。

田辺 [1993] は、宗教を実践宗教<sup>14</sup>として対象化し、中でも儀礼における慣習的知識や行為に着目して、それと政治、権力との関係を究明する。そこでは北タイにおける国家的な精霊祭祀であるプーセ・ヤーセ (*pu sae ya sae*) への水牛供儀における儀礼過程、特に儀礼過程における宗教的实践、行為の場面構成が詳しく分析される。その上で、儀礼過程の宗教的实践に

<sup>12</sup> 言語行為論では、発話の記述的な真偽よりもその発話が行われるという行為遂行的な側面を重視する [オースティン 1978、サール 1986]。

<sup>13</sup> 浜本は、タンバイアが儀礼を行為遂行的と捉えた点に対して、儀礼研究における「例外的な挑戦」としながらも、「儀礼をコミュニケーションあるいは表現行為とした上でその実効性を問題にしているため、中途半端に終わっている」 [浜本 2001:60] としている。また、「タンバイアの取り組みは、儀礼を象徴的行為だと決めつけることによってその実効性を原理的に排除しておいたうえで、発話行為に含まれる行為遂行性になぞらえてそれを再導入しようという、不必要に回りくどく倒錯した試みだと言うしかない。儀礼＝象徴的行為の図式にいかにか人類学者が呪縛されて来たかをよく示した症状である」 [浜本 2001:60] と批判している。

<sup>14</sup> 西井 [2001] は、南タイの仏教徒とムスリムが共存する地方を対象に、実践宗教という視点から詳細な関係のあり方を描きだす。また、林 [2000] は、東北タイにおける精霊祭祀と仏教の実践を、国家編成や社会変化の過程の中に捉え、多方面から長期に渡った記述を重ねている。

において、その慣習的行為が秩序や権力構造の承認に強く関わっており、社会秩序とそれを体現する権力者の権威を承認していくという儀礼の持つ政治的意義が明らかにされる<sup>15</sup>。

このように、タイの人類学的研究において、人々の行為、なかでもその慣習性や拘束性を念頭に社会や秩序との関係を究明しようとする研究は、宗教的側面、特に儀礼における行為の遂行性、つまり儀礼が慣習的行為として構成的に遂行されるという点に焦点をあてていった。この分析視角は、相互行為と社会秩序との関係をミクロな民族誌的視点から捉えようとする時、非常に重要である。しかし、これまでは主に宗教的儀礼の場にその分析が集中してきた。従って、この視角を押し進めて、儀礼以外の様々な集まりの場における行為へと議論を拓げていく余地は残されている。つまり、宗教的な儀礼以外の場における相互行為、すなわち慣習的、拘束的な行為のやりとりを、社会の秩序との関係を視野に入れた具体的過程の中に描いていく探求への可能性が開かれていると考えられるのである。

#### 4. ルークスア・チャオバーン、恐れ、村の中の国家

次に、宗教面以外のタイの人類学的研究で、選択自由ではない行為の拘束性や、それと社会秩序、とりわけ、政治的秩序や権力との問題に

関連する議論として、村落スカウト (village scout) と訳されるルークスア・チャオバーン (*luksu'a chaoban*)<sup>16</sup> の研修訓練に関するいくつかの研究を取りあげておきたい。

まず、小野沢 [1977] は、ルークスア・チャオバーンの規約の分析と4泊5日にわたる訓練過程の活動を分析し、「共同体レベルから組織されて、国家的なまとまりをもつ、国王崇拜を軸とするnationalismの運動としてのVillage Scout」[小野沢1977:44] という性格を指摘している。

また、アメリカの人類学者メッカは、その4泊5日にわたる訓練を通過儀礼として捉える。そこでは、参加者が全て子供に擬せられ、そのほとんどが地方官吏である指導者の下で、軍事的な訓練が行われ、心理的圧迫を加えられることを通して、国家(民族)、宗教(仏教)、国王<sup>17</sup>への忠誠を誓わせることになることを示している [Muecke 1980:414-425]。

タイ人の人類学者チャヤン [Chayan 1984] は、このような国家などの権力構造が、再生産されていく過程を、北タイの農村を調査地として描いた。開発政策のただ中に置かれた農村の、精霊祭祀や仏教、小学校教育<sup>18</sup>などを、「文化的、イデオロギー的再生産 (cultural and ideological reproduction)」の機能を持つものとして分析し、その中の一つに、ルークスア・チャオバーンの研修訓練も取り上げている。

またアメリカの人類学者ボヴィー [Bowie 1997] も、その著書において、全国の村々にお

<sup>15</sup> Tanabe [1991] は、北タイの儀礼、ピー・メン (*phi meng*) と呼ばれる母系親族の祖霊祭祀において、親族内部の年長者の道徳的権威、権力のもとで、婚姻及び性的関係についての規制が強調され、また、村の守護霊祭祀では村長のもとに維持されるべき秩序が導き出されることを示している。

<sup>16</sup> ルークスア・チャオバーンは、ラーマ6世時代(1910-25年在位)に組織された親衛部隊スア・パー (*su'a pa*) を直接的には起源としている。その後1970年代に当時盛り上がりを見せていた学生運動や労働運動、農民運動などに、当時の保守派が対抗させるために反共右翼組織として再組織化したのがルークスア・チャオバーンである。ここで取りあげた研究の他に、江藤 [1994]や事実関係を整理したものに、Kawirat [1989] がある。

<sup>17</sup> 国家、民族 (*chat*)、宗教 (*satsana*)、国王 (*phramahakasat*) は、タイの国家による支配の中核をなすものであり、国旗にもこの3つが意味された色が使われている。特に近代以降においては、支配を強化するために、度々この3つの要素の重要性が繰り返えされてきた。従って、国家(民族)、宗教、国王とは、「国王が元首として臨君し、仏教が繁栄し、国民が国王を敬い、仏教を信奉するという状態を意味する」[石井 1975:294] と指摘される。末廣 [1993] も参照。

<sup>18</sup> 学校教育の果たす役割についてはKeyes [1991] も参照。

ける「国家的忠誠の儀礼 (Rituals of National Royalty)」としてルークスア・チャオバーンを捉え、訓練を通じて参加者が国家や国王、仏教の権力構造を再確認していくことを指摘している。そこでは、具体的な訓練の過程と、訓練におけるいくつかの儀礼的な場面構成も事例として考察される。

これらルークスア・チャオバーンの訓練に関する研究は、その儀礼的側面に注目し、訓練を通じて国家などの秩序や政治的権力が再確認、再強化されるという機能を中心に明らかにしている。

国家などの秩序や政治的権力が再確認、再強化される過程に着目し、それをルークスア・チャオバーンの訓練以外の日常的場面で、社会心理学的に捉えたのは、タイ人のカンチャナー [Kancana 1982] である。カンチャナーは、印象論的な議論にとどまると批判される側面もあるが、タイ社会における「恐れ (*khwam klua*)」を研究し、それが社会的にどのような機能を有しているのかを究明している。つまり、「社会は、自然に対する恐れを基盤として家族、学校、マスコミ、寺院などの社会的機関における父母や教師、僧侶などを通して、様々なレベルで人々に恐れを抱かせることに関与する」 [Kancana 1982:30] として、そのような恐れの作用が権力構造を生み出していくことを指摘するのである。ここでは、具体的なデータとして、小学校の生徒への恐れに関する聞き取り調査とスコタイ時代からの仏教文学「三界経 (*Traiphum Phraruang*)」<sup>19</sup> を用いている。例えば、聞き取り調査の結果では、父母、教師、役人等が恐れを背景とした罰と褒賞の使い分けによって、子どもの行為を拘束していることが指摘され、「三界経」の場合も寺院の壁画などに描かれることを通して、天国と地獄への恐怖を際立たせていることが示される。また、「父母への恐れ、教師への恐れ、権威者への恐れ等、

そのイデオロギー的機能が、社会の微細な装置の中で、日常生活での行為によって展開 (再生産) される」 [Kancana 1982:47] としている。ここで再生産されるとする恐れは、親などの身近なものから、村落における国家の代理機関をなす役人や教師にも及ぶとされている。日常生活においても、秩序や権威が再強化、再生産されるという指摘は重要であるが、他方、分析が心理学的なキーワードに還元されて行くため、その具体的な過程は十分に見えにくくなる可能性も否定できない。

以上のように、農村における国家的権力やそれへの恐れ、あるいは秩序の再強化という機能をもつものとして、ルークスア・チャオバーンの訓練や仏教文学とその壁画、親や教室での教師の役割などが捉えられている。

しかしそれだけではなく、特に近年のタイで国家は、開発をはじめとして、各種の会議や広報、研修など多種多様なかたちで、各地の村に対する働きかけを不断に行っている。この点に関して、オーストラリアの人類学・地理学者、ハーシュ [Hirsch 1989] は、「村の中の国家 (state in the village)」と表現し、国家が村の一部になる程までに働きかけ、介入する、拡大された支配 (extended domination) [Hirsch 1989: 36] のあり方を示した。彼が特に注目する開発政策においては、住民の参加が結局は国家レベルの統合の手段に置き換えられてしまうというディレンマを明らかにしている [Hirsch 1990]。

これらのルークスア・チャオバーンや「恐れ」、「村の中の国家」などに関する議論では、国家の機能に焦点がおかれ、いわゆる上からの支配のあり方に重心がおかれる。ルークスア・チャオバーンに関するいくつかの研究では、訓練における儀礼的な場面構成を取り扱い、その過程を通して国家が住民に対して強制する秩序の再確認を指摘する。それは国家という前提をおきながら、国家の支配を既にそこにあるものとし

<sup>19</sup> 「三界経」とは、スコタイ時代の14世紀後半に書かれたもので、欲界、色界、無色界の三界を論じている。善悪と地獄・天国の存在を教える仏教文学でもある。田中 [1989:120-150]、富田 [1987:756] などを参照。

て描くというよりは、その支配へと向かう具体的な行為の過程にも着目することである。

このように、支配を実体化せず、強制的なものであれ行為が秩序、支配へと向かうという過程を描くことは、本稿の問題関心にとって重要な視点である。従って、その延長線上のタイ社会分析に求められることは、村民が村で実際に経験する研修訓練などにおける統制的な相互行為の具体的なあり方に立ち返ることであり、その支配のあり方のミクロな過程に、十分なより厚い記述で光を当てて行く必要があるということであろう。

## 5. インフォーマルな地方有力者

国家という制度とは別のかたちで村において大きな影響力を及ぼす存在として、人類学的な政治経済論が注目してきたのは、インフォーマルな地方有力者 (informal local power) である。イギリスの人類学者タートン<sup>20</sup>は、農村における階層分化を農民貧困層が直接に対峙するインフォーマルな有力者との関係から検討する [Turton 1989]。これらインフォーマルな地方有力者は村外の官僚や資本セクターと結びつき、特権的経済機会を有するため、そこで得られた利益によって再び村内外でのコネクションを形成し、彼らの権力は再生産されていくという

[Turton 1989:81-88]。

ここで言うインフォーマルな地方有力者とは、典型的には、経済利権をもとにして合法的、非合法的な蓄財を重ね、各地方で圧倒的な影響力を持つ「チャオ・ポー (cao pho)」と呼ばれる人々である。彼らに関しては、パーブックらが、その蓄財の手段や汚職、民主主義制度に与える弊害など、政治経済学的な詳細な分析を行っている [Pasuk and Sungsidh 1994]<sup>20</sup>。また政治学者の玉田 [Tamada 1991] も、チャオ・ポーが及ぼす力を、制度的な権力 (*amnat*) とは異なるインフォーマルな影響力 (*ithiphon*) として区別し、そのインフォーマルな影響力が制度的な権力にも及ぶことを指摘する [Tamada 1991:14]。その他、このインフォーマルな影響力を有するチャオ・ポーに関しては、賭博や闇宝くじ、覚醒剤などの地下経済や地方実業家としての側面、民主的な手続きとの関係など、政治学、経済学的な分析を中心に多くの議論が行われてきた [赤木 1994、田中 2008、Arghiros 2000、2001、McVey 2000、Nuannoi 1996、Ockey 1992、2000、Pasuk 1996、Pasuk and Baker 1997、2000、Pasuk, Sungsidh and Nualnoi 1998、Sombat 1992、2000、Somkiat 1993]<sup>21</sup>。

このように、国家とは別のかたちでのインフォーマルな影響力を議論の射程に入れると言う視角によって、形作られていく社会や秩序のあり方

<sup>20</sup> チャオ・ポーとは元来、それぞれの土地の守護神を意味していたが、近年では経済力と政治力を兼ね備え、しかも違法性を帯びた地方有力者を指す場合が多い [Atcharaphon 1992:235-241、Pasuk and Sungsidh 1994:57-61]。この用法は1960年代に始まるとされ、定着したのは80年代の半ばの映画「ゴッド・ファーザー」以降である。その特徴は以下の通りである [Pasuk and Sungsidh 1994:57-61]。第1に、タンボン (行政区) から数県に及ぶ特定の地域で勢力を持つ。第2に、合法的な事業と並んで違法な事業を行い、経済力を持つ。第3に、護身や違法事業のため殺し屋を自分に抱えており、敵対する者を威嚇し、時には殺害する。第4に、寄付行為、贈賄、婚姻関係等を通じて、官僚と親しい関係を築き、違法事業や犯罪行為の摘発を免れる。第5に、チャオ・ポー同士の対立で殺されることも多い。第6に、官僚自身がチャオ・ポーになることもある。第7に、貧困、官僚との対立など様々な問題を抱えている地域住民に気前良く援助の手を差し伸べて感謝され尊敬を集める。第8に、高い集票力をもち、選挙で重要な票の取りまとめ屋 (ファ・カネーン) となって活躍する。その中の一部は、自ら立候補して代議士となる場合もある。1990年代初頭において、全国でチャオ・ポーは256人、76県中39県にまたがっているとされる [Pasuk and Sungsidh 1994:95]。また、チャオ・ポーが取り組む違法な事業とは、各地域によって、業種が異なる。中部では主に、賭博場や遊興事業、木材伐採など、東北部では、賭博場、近隣諸国の木材伐採、商品作物の売買など、北部では、森林伐採や商品作物の売買、南部では、鉱山や森林伐採を主としている [Pasuk and Sungsidh 1994:96-98]。チェンマイの地方実業家としての側面に関しては、遠藤 [1996] も参照。

<sup>21</sup> 地方選挙における買収などの非合法的な手段を通じて、インフォーマルな影響力が生みだされる過程に関しては、選挙運動の相互行為に着目した別稿も参照 [Takagi 1999、高城 2002]。



を制度面以外のより実態に即したものとして捉えることが可能となる。しかしながら、特に政治経済的な研究においては、具体的な日常の行為や相互行為を十分に議論に組み入れないことから、影響力を持つ者と住民との関係を実体的にそこにあるものとして描き、その上で特長の分析をしていく傾向が強い。この実体的に描こうとする視点は、パトロン・クライアント関係に関する議論に通じるところがある。本稿の問題関心からは、インフォーマルな地方有力者と住民との関係を議論に組み込みながら、そこに相互行為という視点を導入し、関係が生成される過程に着目していく方向性が重要になってくるだろう。

## 6. 日常生活における相互行為

前述したルークスア・チャオバーンの訓練や宗教儀礼などは、国家や宗教的権威が、住民である諸個人に覆い被さってくる側面が強い。このような訓練や儀礼的な場は、現在のタイ農村においても厳然として存在しており、その住民への働きかけは頻繁になされている。従って、具体的なタイ社会の分析では、まずはそのような訓練などの場において、どのような相互行為がなされているのか、そしてそれが社会の秩序や社会といかに結びつくのかに関して、焦点化し記述する必要がある。

他方、農村において住民が経験する相互行為は、研修や儀礼的な場におけるものだけではない。むしろそれらは生活のごく一部であり、日常生活において人々は、毎日の農作業を行い、農業用水をやりくりし、作った米を市場で売つ

て、そこで得た現金で材料を買って食事を作り、選挙と言っては、自分の支援する候補者の手助けをするという、数限りない相互行為を繰り返している。そこでは、国家などが前面に立って、村の住民に働きかけ、覆い被さってくるような訓練などの場とは異なった日常の生活が、しかしながら、そうした環境のもとで、日々営まれているのである。

こうした日常生活における相互行為をタイの人類学的研究の文脈で民族誌的に扱ったのは、アメリカの人類学者モアマン<sup>22</sup>である。特に後年のモアマンは、相互行為をめぐるエスノメソドロジー (ethnomethodology)<sup>23</sup> の理論、中でも会話分析 (conversation analysis) の手法を北タイのタイ・ルー (Tai Lue) 族の民族誌に適用した [Moreman 1988]。そこでは、村の日常生活において村民らがかかわる会話が会話分析の手法に則って詳細に記録、記述され、分析される。モアマンの視線は、日常生活の相互行為を徹視的に取りあげるといった点において重要な指摘を含んでいる。しかし、エスノメソドロジー的な手法は、会話の状況依存的、文脈依存的側面にその分析を限定しようとし、会話を担う当事者のみの視点から捉える主観主義的な傾向が強いため、その手法を徹底した場合、会話の背後にある社会関係や社会といったことを十分に議論し尽くせないという欠点もかかえている<sup>24</sup>。モアマン自身、会話分析的な手法を徹底すれば、民族誌家としてのタイ・ルーの人々や社会への関心が、会話の一般的分析に還元されてしまいかねないという危惧を後に表明している [Moreman 1992:32-33]<sup>25</sup>。

また、タイの人類学者ワッサンは、チェンマ

<sup>22</sup> モアマンは当初、タイ社会をルースとする考えに否定的で、北タイのタイ・ルー族のフィールド調査にもとづいて、村落における寺院や国家の代理機関としての村長の役割など、構造的な側面にも注目すべきことを指摘していた [Moreman 1969]。しかしその後、サククス等のエスノメソドロジー的な会話分析に進んでいった。

<sup>23</sup> 社会学者のガーフィンケルらは、日常生活の会話をその担い手の主観的な視点からみた相互行為の積み重ねとして捉え、その状況依存的、文脈依存的側面を強調する [ガーフィンケル 1987]。

<sup>24</sup> この点に関しては、ブルデュー [Bourdieu 1977:81] や、その後のエスノメソドロジーの批判的議論からもたらされる山田・好井編 [1998:72-87] なども参照。

<sup>25</sup> 一方、アフリカ、狩猟採集民グイの日常会話を長年分析してきた菅原は、グイに特徴的な「相互行為のセンス」に注目し、そこに相互行為と狩猟採集社会との関係を見ようとしている [菅原 1997:245]。



イの中心部にあるひとつの通りで繰り広げられる日常の相互行為を描き出している [Wasan 2000]。この通りは、昼間は普通の通りであるが、夜になると付近一帯が屋台形式の土産物屋や飲食店などで埋め尽くされ、観光客らが押し寄せる賑やかなナイトバザールと呼ばれる市場へと一変する。そこは、観光客や土産物を買う人、飲食物を扱う屋台の人、土産物としての自らの工芸品を売る山地の少数民族、乗り合いタクシーの運転手や客引き、ツーリストポリスなど、多種多様な人々がひとつの通りに集まって濃密な相互行為がやりとりされる場でもある。ワッサンはこの路上という共に在る場で、テレビというモノを中心に交錯する多種多様な相互行為を、ゴッフマン<sup>26</sup>やエスノメソドロジー的な手法を参考にしながら詳細に描き出した。そして、その過程で、路上に集まった人々の間に様々な関係性が生じていることを指摘したのである。

このように、タイ人自らによる近年の研究では、北部タイ、チェンマイのひとつの路上という限られた空間ではあるが、社会や関係性を視野に入れた日常の相互行為を扱う研究が行われるようになってきている。この日常生活の行為と関係性を繋ごうとする視点は、本稿の関心と合致し重要であるが、そこには問題点も指摘できる。まず、ワッサンが対象化した路上は、不特定多数の人が常に出入りするという流動的なある種特殊な場でもあり、農村社会などとは場の性格が異なる点が指摘できる。また、ワッサンが描くような路上の個人は、流動的な場で臨機応変に自由に動き回る功利的な個人像の側面が強調されやすくなる。つまり、そこには行為の慣習性、拘束性よりも選択自由な行為観が色濃く現れることになるのである。

## 7. おわりに — 残された問題

本稿は、変動の中にある現代タイ社会をマクロな政治経済学的分析のみで捉えることに疑問を呈し、人々の行為に足場をおいたミクロな視点からもタイ社会を照射する分析方向を探るための予備的考察であった。そのために、タイにおける相互行為と社会秩序をめぐる問題に対して、ミクロな分析を特徴とする人類学的研究が如何に議論を積み重ねてきたのか、研究の歴史を紐解いてきた。

そうした先行研究の整理から、今後の具体的分析に残された問題や乗り越えるべき問題の所在をまずは指摘しておきたい。それは要約すれば、概ね「選択自由な行為観」、「関係の実体論」、「主観主義的相互行為論」、「観念的体系の構造論」という4つの問題として整理できるだろう。

残された問題、乗り越えるべき問題の第1は、選択自由で西欧個人主義的な色合いが濃い行為観である。それは、タイの人類学的研究において、ルース概念やパトロン・クライアント関係の議論、あるいはモアマンやワッサンによる会話や行為の分析において見られた。

こうした行為観では、社会の中で自由に動き回る個人が強調されるため、社会の秩序や社会というところに議論が収斂して行きにくい側面が残る。従って今後の具体的な分析においては、選択自由な行為よりも行為の慣習性、拘束性を十分に考慮に入れる必要が指摘されることになる。

乗り越えるべき第2の問題は、関係の実体論である。つまり、パトロン・クライアント関係の議論に端的に見られるように、関係を既にそこにあるものとして、実体化して捉える視点に関するものである。同様に、インフォーマルな地方有力者と住民との関係に関する政治経済的な研究も、関係を実体とした上でその特長を分

<sup>26</sup> アメリカの社会学者ゴッフマンは、人と人が居合わせている場面を「共在」とし、そこで行われる相互行為を徹底的に掘り下げて主題化した。同時に、相互行為を間身体的な行為として捉え、秩序との関係で捉えようとしている [ゴッフマン 1980]。

析することに向かっていた。そこでは、個人の行為に着目したとしても、最終的には既にある実体的関係の分析が主となり、行為はあくまで実体の説明要素としての位置づけとなっていた。従って相互行為と社会秩序のより徹底的で動態的分析に向かうためには、既にそこにあるとされる実体的な関係概念を一旦カッコに入れ、日常生活における相互行為によって、関係性や秩序が生成されていく過程を丹念に追っていく必要があると言えるだろう。

乗り越えるべき第3の問題は、主観主義的な相互行為論である。それは、エスノメソドロジーの研究において端的に見られ、タイの人類学的研究ではこの手法を会話分析として取り入れたモアマンの研究に見られる。そこでは、会話を担う当事者のみの視点から捉える主観主義的な傾向が強く、この手法を徹底した場合、会話の背後にある社会関係や社会秩序といったことを十分に議論し尽くせないということにもなりかねない。つまり、主観的な相互行為そのもののみを分析する傾向が強く、社会や秩序、構造といった客観的な概念に十分な注意を向けていかないのである。

先行研究から導き出される第4の問題は、第3の問題とは逆に、個や個の行為に比して、世界観や観念的体系の構造を重視する見方である。例えばそれは、タンバイアの提起した銀河系政体論などの観念的構造や体系的な全体に重きを置く研究に見られる。また、パトロン・クライアント関係の議論を発展させ、関係を規定する世界観を始発とし、その世界観が個々の行為までも決定するという方向へと進んでいったムルダの研究にも見られる。そこでは、全ての源泉が世界観に還元、回収されるため、行為が行われる地平に視座を定めた分析が困難となる可能性があった。

以上、先行研究に残された問題を4つに整理した。最後に、ここから導き出される新たな研究方向を簡単にまとめておきたい。まず第1に、選択自由な主観主義的相互行為論を相対化しそこから脱却する必要があるということである。

つまり、自らの意志で自由に選択していくという行為のやりとりを主観主義的に分析する行為観から抜け出すということでもある。選択自由な行為観ではなくて、人々が日常生活を生き、他の人と共に在る中で、その都度ごとに意識的に考え込んだり反省したりすることもないような慣習的、拘束的な行為のやりとりを、ここで言う相互行為として捉えていくのである。今後の新たな研究では、こうした行為の慣習性と拘束性に人々が生きる社会との繋がりがより明確に見えてくる点に注意をむけていく必要があるだろう。

第2に、行為の慣習性と拘束性が色濃く見られる場合は、先行研究で宗教儀礼を中心に引き上げられてきたが、今後の新たな研究では、それ以外の集まりの場にも具体的な分析を拡げていく必要があるだろう。宗教的な儀礼以外の場として、研修訓練などの場の統制的な相互行為を焦点化すると共に、日々繰り返される日常生活における相互行為を、その行為の慣習性、拘束性にも注意を払いながら、いくつか対象化すべきことが求められるのである。

こうして、日常生活を含めた様々な場における相互行為が社会における関係性や秩序とどうか結びついていくのか、具体的な過程として民族誌的に記述していくという新たな方向が結論として提示される。換言すれば、タイの社会秩序を具体的な行為の過程の中に、またその行為という地平から徹視的に描き出すこと、この点が今後の研究に求められる最も重要な視座であると言えるだろう。

## 参考文献

### 日本語文献

- 赤木攻 1994 「チャオポーの台頭—地方政治」  
小野沢正喜編 『アジア読本—タイ』 河出書房新社 242-249頁。  
アーナン・カーンチャナパン 1993 「北タイにおける治療儀礼—モー・ムアンの力と地位の

変化」 加藤久美子訳 田辺繁治編 『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』 京都大学学術出版会 135-160頁。

石井米雄 1975 『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』 創文社。

今村仁司 2000 『交易する人間—贈与と交換の人間学』 講談社。

江藤双恵 1994 「ルークスア・チャオバーンに関する一考察—イデオロギーから暴力へ」 田中忠治先生退官記念論文集刊行委員会編 『地域学を求めて』 田中忠治先生退官記念論文集刊行委員会 329-355頁。

遠藤元 1996 「タイにおける地方実業家の事業展開—チェンマイを事例として」 『アジア経済』 37(9) 54-82頁。

オースティン,J.L. 1978 『言語と行為』 坂本百大訳 大修館書店。

小野沢正喜 1977 「タイにおけるナショナルリズムと村落の変動—Village Scout運動に関する文化人類学的研究」 『比較教育文化研究施設紀要』 27 九州大学比較教育文化研究施設 29-47頁。

ガーフィンケル,H. 1987 『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳 せりか書房。

北原淳 1996 『共同体の思想—村落開発理論の比較社会学』 世界思想社。

ゴッフマン,E. 1980 『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』 丸木恵祐・本名信行訳 誠信書房。

サール,J.R. 1986 『言語行為—言語哲学への試論』 土屋俊・坂本百大訳 勁草書房。

末廣昭 1993 『タイ—開発と民主主義』 岩波新書。

菅原和孝 1997 「会話における連関性の分岐—民族誌と相互行為理論のはざままで」 谷泰編 『コミュニケーションの自然誌』 新曜社 213-246頁。

高城玲 2002 「権力を生みだすコミュニティ—中部タイの地方選挙」 田辺繁治・松田素二編 『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』 世界思想社 191-212頁。

田中忠治 1989 『タイ—歴史と文化』 日中出版。

田中忠治 2008 『タイ 社会の全体像—地域学の試み』 日中出版。

田辺繁治 1993 「供儀と仏教的言説—北タイのプーセ・ヤーセ精霊祭祀」 田辺繁治編 『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』 京都大学学術出版会 35-70頁。

富田竹二郎 1987 『タイ日辞典』 養徳社。

西井涼子 2001 『死をめぐる宗教実践—南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティブ』 東京外国語大学アジア・アフリカ研究所。

日本タイ協会編 2008 『現代タイ動向2006-2008』 めこん。

浜本満 2001 『秩序の方法—ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』 弘文堂。

林行夫 2000 『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』 京都大学学術出版会。

山田富秋・好井裕明編 1998 『エスノメソドロジーの想像力』 せりか書房。

## 英語文献

Akin Rabibhadana 1969 *The Organization of Thai Society in the Early Bangkok Period 1782-1873*, Cornell University Press.

Anuman Rajadhon 1961 "General System of Phonetic Transcription of Thai Characters into Roman", in *The Nature and Development of the Thai Language*, pp.32-36.

Arghiros,D. 2000 "The Local Dynamics of the New Political Economy: A District Business Association and Its Role in Electoral Politics", in McVey, M. (ed.), *Money and Power in Provincial Thailand*, University of Hawaii Press,pp. 123-153.

Arghiros,D. 2001 *Democracy, Development and Decentralization in Provincial Thailand*, Curzon.

Bourdieu,P. 1977 *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge University Press.

Bowie,K. 1997 *Rituals of National Loyalty: An Anthropology of the State and the Village Scout Movement in Thailand*, Colombia University Press.

Chatthip Nartsupha 2005 "The State of Thai Studies: A Critical Survey", *Journal of Thai-Tai Studies* 1(1): 3-18.

Chayan Vaddhanaphuti 1984 "Cultural and Ideological Reproduction in Rural Northern Thailand", Ph.D. thesis, Stanford University.

Chayan Vaddhanaphuti 1993 "Traditions of Village Study in Thailand", in Hirsch, P.(ed.), *The Village in Perspective:Community and Locality in Rural Thailand*, Chiang Mai University, pp. 9-38.

Embree,J.F. 1950 "Thailand: A Loosely Structured

- Social System”, *American Anthropologist* 52(2): 181-193.
- Evers, Hans-Dieter (ed.) 1969 *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective*, Yale University.
- Hanks, L.M. 1962 “Merit and Power in the Thai Social Order”, *American Anthropologist* 64: 1247-1261.
- Hanks, L.M. 1975 “The Thai Social Order as Entourage and Circle”, in Skinner, G.W. and A.T. Kirsch (eds.), *Change and Persistence in Thai Society*, Cornell University Press, pp.197-218.
- Hirsch, P. 1989 “The State in the Village: Interpreting Rural Development in Thailand”, *Development and Change* 20: 35-56.
- Hirsch, P. 1990 *Development Dilemmas in Rural Thailand*, Oxford University Press.
- Kemp, J.H. 1984 “The Manipulation of Personal Relations: From Kinship to Patron-clientage”, in Han ten Brummelhuis and J.H. Kemp (eds.), *Strategies and Structures in Thai Society*, Anthropological-Sociological Centre, University of Amsterdam, pp.55-70.
- Kemp, J.H. 1992 *Hua Kok: Social Organization in North-Central Thailand*, Centre for Social Anthropology and Computing and the Centre of South-East Asian Studies, University of Kent at Canterbury.
- Keyes, C.F. 1991 “The Proposed World of the School: Thai Villagers’ Entry into a Bureaucratic State System”, in Keyes, C.F. (ed.), *Reshaping Local Worlds: Formal Education and Cultural Change in Rural Southeast Asia*, Yale University Southeast Asia Studies, pp.89-130.
- Kirsch, A.T. 1969 “Loose Structure: Theory or Description”, in Evers, Hans-Dieter(ed.), *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective*, Yale University, pp.39-60.
- McCargo, D. and Ukrist Pathmanand 2005 *The Thaksinization of Thailand*, NIAS Press.
- Moerman, M. 1969 “A Thai Village Headman as a Synaptic Leader”, *Journal of Asian Studies* 28 (3): 535-549.
- Moerman, M. 1988 *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis*, University of Pennsylvania Press.
- Moerman, M. 1992 “Life after C.A.: An Ethnographer’s Autobiography”, in Watson, G. and Seiler, R. (eds.), *Text in Context*, Sage Publications, pp. 20-34.
- Muecke, M.A. 1980 “The village Scouts of Thailand”, *Asian Survey* 20(4): 407-427.
- Mulder, J.N. 1969 “Origin, Development, and Use of the Concept of ‘Loose Structure’ in the Literature about Thailand: An Evaluation”, in Evers, Hans-Dieter(ed.), *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective*, Yale University, pp.16-24.
- Mulder, J.N. 1979a *Everyday Life in Thailand: An Interpretation*, Duan Kamon.
- Mulder, J.N. 1979b “Concept of Power and Moral Goodness in the Contemporary Thai Worldview”, *Journal of the Siam Society* 67(1): 111-131.
- Nishii, R. 1999 “Experience and Cultural Dynamics: Japanese Anthropologists on Tai Cultures”, *Tai Culture* 4(1): 16-31.
- Nostitz, N. 2009 *Red vs. Yellow Volume 1: Thailand’s Crisis of Identity*, White Lotus.
- Ockey, J. 1992 “Business Leaders, Gangsters, and the Middle Class: Societal Groups and Civilian Rule in Thailand”, Ph.D. thesis, Cornell University.
- Ockey, J. 2000 “The Rise of Local Power in Thailand: Provincial Crime, Elections and the Bureaucracy”, in McVey, M. (ed.) *Money and Power in Provincial Thailand*, University of Hawaii Press, pp.74-96.
- Pasuk Phongpaichit and Baker, C. 1997 “Power in Transition: Thailand in the 1990s”, in Hewison, K. (ed.), *Political Change in Thailand: Democracy and Participation*, Routledge, pp.21-41.
- Pasuk Phongpaichit and Baker, C. 2000 “Chao Sua, Chao Pho, Chao Thai: Lords of Thailand’s Transition”, in McVey, M. (ed.), *Money and Power in Provincial Thailand*, University of Hawaii Press, pp.30-52.
- Pasuk Phongpaichit and Baker, C. 2009 *Thaksin (Second Edition)*, Silkworm Books.
- Pasuk Phongpaichit and Sungsidh Piriyaarngsan 1994 *Corruption and Democracy in Thailand*, Silkworm Books.
- Pasuk Phongpaichit, Sungsidh Piriyaarngsan and Nualnoi Treerat 1998 *Guns, Girls, Gambling, Ganja: Thailand’s Illegal Economy and Public Policy*, Silkworm Books.
- Phillips, H.P. 1965 *Thai Peasant Personality: The Patterning of Interpersonal Behavior in the Village of Bang Chan*, University of California Press.
- Pornpen Hantrakool 1991 “Thai Studies in Thailand: A Review”, *Asian Research Trends* 1:1-30.

- Potter, J.M. 1976 *Thai Peasant Social Structure*, University of Chicago Press.
- Sharp, L. et al. (eds.) 1953 *Siamese Rice Village: A Preliminary Study of Bang Chan*, Cornell Research Center.
- Sombat Chantornvong 2000 "Local Godfathers in Thai Politics", in McVey, M. (ed.), *Money and Power in Provincial Thailand*, University of Hawaii Press, pp.53-73.
- Surichai Wun'Gaeo 1984 "Society and Culture in Rural Thailand(1970-1984): Current Trends and Directions", paper presented at the International Conference on Thai Studies, Bangkok.
- Takagi, R. 1999 "Interaction and Power Relations: A Village Head (*kamnan*) Election in Central Thailand", *Tai Culture* 4(1): 153-168.
- Tamada, Y. 1991 "Itthiphon and Amnat: An Informal Aspect of Thai Politics", *Southeast Asian Studies* 28(4): 445-465.
- Tambiah, S.J. 1970 *Buddhism and Spirit Cults in North-east Thailand*, Cambridge University Press.
- Tambiah, S.J. 1976 *World Conqueror and World Renouncer*, Cambridge University Press.
- Tambiah, S.J. 1985 *Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective*, Harvard University Press.
- Tanabe, S. 1991 "Spirits, Power and Discourse of Female Gender: The Phi Meng Cult of Northern Thailand", in Manas Chitakasem and Turton, A. (eds.), *Thai Constructions of Knowledge*, School of Oriental and African Studies, University of London, pp.183-212.
- Terwiel, B.J. 1984 "Formal Structures and Informal Rules: An Historical Perspective on Hierarchy, Bondage and the Patron-Client Relationship", in Han ten Brummelhuis and Kemp, J.H. (eds.), *Strategies and Structures in Thai Society*, University of Amsterdam, pp.19-38.
- Turton, A. 1989 "Local Power and Rural Differentiation", in Hart, G. and A. Turton et al. (eds.), *Agrarian Transformations: Local Processes and the State in Southeast Asia*, University of California Press, pp.70-97.
- Van Roy, E. 1971 *Economic Systems of Northern Thailand*, Cornell University press.
- Wijeyewardene, G. 1971 "A Note on Patrons and Pau Liang", *Journal of Siam Society* 59(2): 229-234.
- タイ語文献
- Akin Rabibhadana 1980 "Khongsang Sangkhom Thai lae Panha kiao kap Kasetakon nai Kanphatthana (開発下のタイ社会構造と農民問題)", in Thammasat University (ed.), *Kao to Pai khong Sangkhom Thai* (タイ社会の前進), Thammasat University, pp.164-187.
- Anan Ganjanapan, Thawit Sukhaphanit and Nidhi Eoseewong et al. 1990 "Watthanatham Pho Liang : Liang Khrai lae Khrai Liang (ポー・リアンの文化—誰を養い誰が養うのか)", *Samut Sangkhomasat* (社会学誌) 12(3-4): 152-174.
- Atcharaphon Kamutphitmai 1992 "Cao Pho (チャオ・ポー)", in Suwanna Satha-anand and Nuangnoi Boonyanate (eds.), *Kham: Rongroi Khwam Khit Khwam Chu'a Thai* (キーワード—タイ人の思考と信仰の手がかり), Chulalongkorn University, pp.235-241.
- Chatchai Na ChiangMai 1990 "Kan Plianplaeng thang Sangkhom kap Phru'ttikan thang kan Mu'ang khong Chaona nai Phak Nu'a (社会変動と北部農民の政治行動)", in Anaya Puchongkhakun (ed.) *Rat kap Muban nai Thai Su'ksa: Ekasan Wichakan Andap thi 61* (タイ研究における国家と社会—研究書61号), Sathaban Thai Khadi Su'ksa, Thammasat University (タマサート大学タイ研究所), pp.204-261.
- Kancana Kaewthep 1982 "Botwikhro 'Khwam Klua nai Sangkhom Thai' Duai Thlusadi Citwithaya Citwikhro lae Sangkhomwithaya Marx (心理学、精神分析学、マルクス社会学によるタイ社会における恐れの研究)", in *Warasan Sethasat kan Mu'ang* (政治経済学誌) 2 (2): 28-50.
- Kawirat Khunaphat 1989 "Luksu'a Chaoban: Bang Sing Bang Yang Cak 6 Tulakhom 2519 (ルークスア・チャオバーン—1976年10月6日事件をめぐる諸問題)", *Warasan Thammasat* (タマサート大学誌) 15(3):151-165.
- Unnanoi Trirat 1996 "Kan Kha Ya Septit : Phonprayot thi Kiao Khong(覚醒剤販売—関連利益)", in The Political Economy Centre, Chulalongkorn University (ed.), *Setthakit Nok Kotmai lae Nayobai Satharana Nai Prathet Thai* (タイにおける違法経済と公共政策), The Political Economy Centre, Chulalongkorn University, pp.25-74.
- Pasuk Phongphaichit 1996 "Setthasat Kan Mu'ang Wa Duai Huai Tai Din (闇宝くじの政治経済学)", in The Political Economy Centre,

- Chulalongkorn University (ed.), *Setthakit Nok Kotmai lae Nayobai Satharana Nai Prathet Thai* (タイにおける違法経済と公共政策), The Political Economy Centre, Chulalongkorn University, pp. 340-375.
- Sombat Chantrawong 1992 “Botbat khong Cao Pho Thongthin nai Setthakit lae Kan Mu’ang Thai (タイの政治、経済におけるチャオ・ポーの役割)”, in Pasuk Phongpaichit and Sungsidh Priyaranngasan (eds.), *Rat, Thun, Cao Pho Thongthin lae Sangkhom Thai* (国家、資本、地方チャオ・ポーとタイ社会), The Political Economy Centre, Chulalongkorn University, pp.117-140.
- Somkiat Wantana 1993 “Nak Thurakit Thongthin kap Prachathippatai (地方ビジネスマンと民主主義)”, in Sangsit Phiriyarngasan and Pasuk Phongpaichit (eds.), *Chon Chan Klang Bon Krasae Prachathippatai Thai* (タイの中流階級と民主主義の潮流), The Political Economy Centre, Chulalongkorn University, pp.195-226.
- Wasan Pannyakao 2000 *Chiwit Khang Thanon: Kan Su’ksa Choeng Chatphan Wanna Wa Duai Phu Chom Thorathat Yam Khamkhu’n Bon Thanon Sai Nu’ng Nai Mu’ang ChaingMai* (路上往来の生活—チェンマイ市の路上における夜間のテレビ視聴者に関する民族誌的研究), ChaingMai University.